

第6章 学生生活と課外活動

第1節 学生生活

1) 本学教育課程の特色

本学の創設の理念と基本構想には当時の社会状況とその要請が多分にとり入れられ、高度成長の歪が著しくなって低成長期へ移行するにあたり、今までの深い反省と将来を先取りする期待をもってつくられています。すなわち医と薬とは疾病を防ぎ、治癒させ、人類の健康を守る共通目的をもち、ただその方法や分担に相違はあっても、互いに緊密な協力が必要なものと一体的なものであります。この両者は近代科学の分化とともに専門的に分離される傾向にあるため、これから脱却して一体的教育研究の推進を図ることがまず第一であります。次に本学に附置されている国立唯一の和漢薬研究所を特徴づける古来わが国で親しまれてきた東洋医学（漢方）と、明治以来導入され現行医療の主流になっている西洋医学とを改めて見直し、両医療の長所を伸ばし、欠けたところを補い合わせ、将来に役立つ新しい医療の進展を企てることが第二であります。

これらの理念と構想とに基づいて本学の教育課程が作られたので、特に教養部は設けず、医薬両学部はそれぞれ6年と4年の一貫教育で、いわゆる楔型^{クサビ}で、一般教養と専門が接し、例えば体育・語学等も専門に入った高学年でも行っていました。また共通科目を設け両学部の教官の相互乗り入れ態勢をとり医薬合同講義も行っています。附属病院は大学直属の病院として両学部が教育研究の場として用い、薬剤部では薬学部4年生の卒業研究の指導も行っており、和漢診療部では和漢薬論を開設しています。

開学当初から1年3学期制を採用し、各学年末に年度内不合格零単位の厳しきで進級判定をしてきましたが留年者が多く、ついで2科目4単位まで仮進級を認めるなど緩和したがあまり変わらず、一方昭和54年度から共通一次試験が実施され、入学してくる学生の学力・意識・価値観の推移変化もあり、カリキュラムの過密化、時間数の増加等、楔型教育の弊害も感じられ、6年間の教育経験を踏まえて見直しを行いました。

た。

昭和56年以来学内で医学教育検討委員会、薬学部カリキュラム検討委員会、一般教育運営委員会及び各学部教授会において精力的かつ慎重に審議を重ね、昭和57年秋には基本方針が決め、昭和58年3月の評議会で最終的に決定し、4月から実施しました。この改正では前もって学生新聞に掲載したり説明会を開催するなど周知徹底を計り、ゆとりあるカリキュラムを主眼とし、学生諸君にはこの趣旨を十分理解し、自主的学習意欲を期待しています。

改正の概要は次のとおりであります。

1 基本的事項

- (1)学期を3学期制から2学期制に変更する。
カリキュラムの過密スケジュールを緩和し、また課外活動における各種大会の開催時期について他大学と歩調を合わせることにした。
学期はさらに必要に応じ前半後半区分し得ることにした。
- (2)一般教育科目、外国語科目、保健体育科目、基礎教育科目は2年次までに修得する。3年次以降は専門教育科目を集中効果的に修得することにした。
- (3)学則第18条(在学年限)中「かつ、同一の年次に2年を超えて在学することができない。」を削除する。
- (4)新1年次から適用し2年次以上の現在学生に係る移行措置は別に定める。

2 一般教育科目

内容充実のために、人文科学系に「音楽」、「美術」を、社会科学系に「文化人類学」を新たに開設し、人文科学系社会科学系の授業科目を3科目ずつ4グループに分け選択の幅を広げ、履修の機会を増やすこととした(1・2年次合同講義)

3 外国語科目

(医学部)自由科目として「仏語」「ラテン語」を新たに開設することとした。

(薬学部)「仏語」を新たに開設し、第二外国語(4単位必修)を「英語」「独語」「仏語」

の中から1科目を選択できるものとし、現行の要件単位数を16単位から12単位に変更した。また自由科目として「ラテン語」を新たに開設した。

4 保健体育科目

(医学部) 現行の修得単位数の保健体育講義1単位、体育実技3単位を薬学部現行と同様にそれぞれ2単位に変更した。

5 基礎教育科目

本学の特色とする医薬一体としての「医薬学概論」は従来学長・副学長が両学部一年次生に対して講義形式で行ってきたが、新カリキュラムにおいては学長・副学長は最初の3回だけに止め、後は医薬両学部に分かれてそれぞれの学生に教官が工夫してシンポジウム自主討論形式で問題提起の新しい方法で実施し、医学・薬学を志す学生に早期に心構えと自覚意識をもたせる様、見学・実習も取り入れている。

(医学部)「薬用生物学」「細胞生物学」を新たに開設し、現行の「放射線基礎学」を「放射線基礎医学」として専門教育科目に組み入れ充実した。

(薬学部) 現行の基礎教育科目は全て専門教育科目に組み入れ充実した。

6 専門教育科目

「医薬共通合同講義」を新たに開設し、毎年関連分野の特色あるテーマを決め実施することとした。

(医学部) 関連科目として「歯科口腔外科学」、「リハビリテーション医学」を新たに開設し、現行の「人類遺伝学」は「基礎遺伝学」および「臨床遺伝学」に拡大充実した。

(薬学部) 現行の三系列中二系列必修の履修方法を廃止し、選択として各系列(有機化学系、物理化学系、生物系)より各4単位を修得するものとし、調和のとれた履修を行うこととした。

7 卒業要件単位数および時間数

(医学部) 現行の一般教育科目等71単位+専門教育科目4,800時間を、69単位+4,779時間とする。

(薬学部) 現行の一般教育科目等67単位+

専門教育科目95単位=162単位を、51単位+94単位=145単位とする。

8 学年暦(昭和60年度分)

[前学期]

4月10日11日 入学式・オリエンテーション

4月12日～7月15日 授業

7月16日～7月18日 振替及び補講

7月22日～8月31日 夏季休業

9月2日～9月14日 授業

9月17・18日 補講

9月19日～9月30日 期末試験

[後学期]

10月1日 開学記念日

10月7日～12月24日 授業

12月25日～1月7日 冬季休業

1月8日～2月6日 授業

2月7日～2月13日 振替及び補講

2月14日～2月24日 期末試験

3月20日 卒業式

3月21日以降 春季休業

9 授業時間について

現行1コマ80分(1.5時間)を100分(2時間)とする。

10 以上の改正に伴い学則も改正、両学部履修内規、年次移行基準も改正し、薬学部は外国語科目履修方法を作成した。

(「学園だより」15号昭和58年3月19日発行18頁～28頁 参照)

2) 経済援助

イ. 奨学生

日本育英会奨学生の推薦は、育英会から示される推薦枠をもとに、希望者を募り、学部学生は学生委員会、大学院医学研究科生は医学研究科教務委員会、大学院薬学研究科生は薬学研究科委員会と、それぞれの審議機関において推薦基準に基づき選考の上、行っている。

本学学生の現在の採用状況は、表1のとおりであり、学生数に対する貸与者の比率は、学部生で25%、大学院生は50%となっている。

貸与額は、学部生の例でみると、昭和51年度入学生の一般貸与は月額11,000円、特別貸与は自宅生13,000円、自宅外生で18,000円であったが、昭和60年度入学生では、自宅生22,000円、自宅外生で28,000円と授業料の値上げにはほぼ比

例して順次増額されてきている。大学院も博士課程が月額48,000円→75,000円、修士が38,000円→65,000円と学部生と同様に順次増額されている。貸与額に対する学生の希望状況をみると、約半数の学生は現状で満足しているが、あとの半数は増額を希望しており、その額は、10,000円程度とする者が多い。

また、日本育英会以外の育英奨学団体の採用者も数多く、昭和51年度から現在まで、本学が取扱った育英団体と採用者数は、51団体、95名となっており、その内訳は、表2のとおりである。

表1

区 分	学生数 (60.5 現在)	奨学金の種類					合 計
		第1種	第2種	一般貸与	特別貸与	人 (%)	
学 部	人	人	人	人	人	人 (%)	
医 学 部	632	24	7	46	70	147(23.3)	
薬 学 部	431	28	2	32	60	122(28.3)	
部 計	1,063	52	9	78	130	269(25.3)	
大 学 院	医学研究	59	39			39(66.1)	
	薬学研究	86	36			36(41.9)	
	計	145	75			75(51.7)	
	合 計	1,208	127	9	78	130	344(28.5)

表2

奨 学 金 名	医	薬	計
厚生省公衆衛生修学資金	2		2
富山県医学生等修学資金	1		1
富山県母子福祉修学資金	2		2
石川県奨学金	11	4	15
長野県医学生等修学資金	1		1
神奈川県公衆衛生修学資金	1		1
大阪府育英会奨学生	2	5	7
鹿児島県大学特別奨学金	1		1
茨城県奨学資金	1		1
東京都公衆衛生修学資金	3		3
埼玉県公的保健医療機関勤務医及び 歯科医師修学資金	1		1
岐阜県修学資金	1		1
群馬県母子福祉修学資金	1		1
茨城県寡婦福祉修学資金	1		1
富山市育英基金奨学金	1	1	2
富山市横山奨学金	1	1	2
滑川市奨学金		2	2
黒部市奨学金	2		2
桐生市奨学金	2	1	3

江戸川区医学生等修学資金	1		1
上越市奨学金		1	1
浜松市奨学金	1		1
川崎市公衆衛生修学資金	1		1
佐野市奨学金	1		1
宇都宮市奨学金		1	1
勝山市奨学金		1	1
須坂市奨学金	1		1
浦和市奨学金	1		1
横浜市公衆衛生修学資金	1		1
輪島市奨学金	1		1
いわき市奨学資金	1		1
堺市奨学金		1	1
上市町奨学資金	1		1
大山町奨学金	1		1
井波町竹村奨学金	1		1
安田町奨学金	1		1
高森町奨学金	1		1
穴水町奨学金	1		1
上平村医学生修学資金	1		1
山田村奨学金		1	1
青木村奨学金		1	1
吉田育英会奨学金	3	2	5
富銀育英会奨学生		1	1
住友生命福祉事業団医学奨学生	10		10
原口奨学金	1		1
森下仁丹奨学金		1	1
霊山育英会奨学生		1	1
交通遺児育英会奨学生		1	1
中村積善会奨学生	2		2
黎明館土田家育英事業奨学生		1	1
江副育英会奨学生		1	1
計	67	28	95

ロ. 授業料免除

本学に、第1期生が入学した昭和51年4月当時の国立大学授業料の年額は、96,000円であった。その後、昭和53年度入学者からは、144,000円、昭和55年度は180,000円、昭和57年度は216,000円、昭和59年度入学者の後期から半期分126,000円と隔年ごとに改訂され、昭和60年4月の入学者については、年額252,000円となっている。

学生の奨学・援護の一環として、授業料免除制度がとられているが、本学においても、この制度の適切な活用を図るため、昭和51年4月1日に「富山医科薬科大学授業料免除及び徴収猶予に関する規程」が制定され、また、免除者の

選考に関する基準を、より明確にするため昭和54年4月1日に「富山医科薬科大学授業料免除等選考基準」を制定する等所要の学内規程を整備するとともに授業料免除制度の適切な運用を図るよう努力している。

本学における授業料免除は、前期分、後期分ごとに希望者を募り、学生委員会において、学業成績および経済面について規程に基づき選考の上決定しており、昭和51年度からの免除者は、表1のとおりである。

半額免除者が少ないのは、免除実施可能額（昭和56年度以前の入学者については、収入予

定額の8%、昭和57年度以降の入学者は、同10%）に対して免除申請者が少なく、免除選考基準の要件を満たす者については、ほぼ全員、全額免除できたためである。また、昭和57年度から免除者数が減少しているのは、各世帯の所得額が年々増えてきたのに比して、最高所得基準額が据え置かれていたため、家計基準オーバーによる免除不許可者が多くなったことによるものである。所得基準額が若干増額された昭和59年度に免除者も若干増えているのが、これを表しているものと思われる。

表1 学部生授業料免除者数

年 度	学 生 数			免 除 者							
	医	薬	計	前期 後期	医 学 部		薬 学 部		合 計		
					全 額(%)	半 額(%)	全 額(%)	半 額(%)	全 額(%)	半 額(%)	
51	100	105	205	前期	0	0	1 (1.0)	0	1 (0.5)	0	
				後期	6 (6.0)	0	4 (3.8)	0	10 (4.9)	0	
52	201	209	410	前期	8 (4.0)	0	3 (1.4)	0	11 (2.70)	0	
				後期	13 (6.5)	0	5 (2.4)	0	18 (4.4)	0	
53	303	312	615	前期	17 (5.6)	0	16 (5.1)	0	33 (5.4)	0	
				後期	23 (7.6)	0	33 (10.6)	0	56 (9.1)	0	
54	403	414	817	前期	25 (6.2)	0	38 (9.2)	2 (0.5)	63 (7.7)	2 (0.2)	
				後期	29 (7.2)	1 (0.2)	41 (9.9)	0	70 (8.6)	1 (0.1)	
55	503	460	963	前期	27 (5.4)	0	37 (8.0)	0	64 (6.6)	0	
				後期	28 (5.6)	0	42 (9.1)	0	70 (7.3)	0	
56	601	469	1,070	前期	34 (5.7)	0	36 (7.7)	0	70 (6.5)	0	
				後期	28 (4.7)	0	38 (8.1)	0	66 (6.2)	0	
57	625	443	1,068	前期	23 (3.7)	0	25 (5.6)	0	48 (4.5)	0	
				後期	27 (4.3)	0	28 (6.3)	0	55 (5.1)	0	
58	623	437	1,060	前期	21 (3.4)	0	18 (4.1)	0	39 (3.7)	0	
				後期	23 (3.7)	0	19 (4.3)	0	42 (4.0)	0	
59	632	431	1,063	前期	25 (4.0)	0	18 (4.2)	0	43 (4.0)	0	
				後期	32 (5.1)	0	18 (4.2)	0	50 (4.7)	0	

() 内は学生数に対する免除者の割合を示す。

表2 大学院生授業料免除者数

年 度	学 生 数			免		除		者		
	医	薬	計	前期	医 学 研 究 科		薬 学 研 究 科		合 計	
				後期	全 額(%)	半 額(%)	全 額(%)	半 額(%)	全 額(%)	半額(%)
53		27	27	前期			5 (18.5)	0	5 (18.5)	0
				後期			5 (18.5)	0	5 (18.5)	0
54		56	56	前期			17 (30.4)	0	17 (30.4)	0
				後期			9 (16.1)	0	9 (16.1)	0
55		58	58	前期			11 (19.0)	0	11 (19.0)	0
				後期			10 (17.2)	0	10 (17.2)	0
56		64	64	前期			7 (10.9)	0	7 (10.9)	0
				後期			6 (9.4)	0	6 (9.4)	0
57	26	74	100	前期	1 (3.8)	0	7 (9.5)	0	8 (8.0)	0
				後期	1 (3.8)	0	7 (9.5)	0	8 (8.0)	0
58	39	78	117	前期	5 (12.8)	0	10 (12.8)	0	15 (12.8)	0
				後期	2 (5.1)	0	9 (11.5)	0	11 (9.4)	0
59	59	86	145	前期	2 (3.4)	0	7 (8.1)	0	9 (6.2)	0
				後期	2 (3.4)	0	7 (8.1)	0	9 (6.2)	0

() 内は学生数に対する免除者の割合を示す。

ハ、学生生活実態調査

学生生活の実態調査は、本学学生の経済面と健康等の実態を把握し、学生生活の充実向上を図る基礎資料を得ることを目的として、現在までに2回実施されている。最初は、まだ学年進行途上の昭和55年に実施され、2回目は、学年進行がほぼ完成した昭和58年に実施された。(大学院医学研究科は昭和60年度完成)今後も引き続き3年ごとに実施する予定である。

調査対象は、学部学生とし、調査方法は、学生2分の1を抽出し、学生課厚生係で調査票を配付、回収した。

回収率は、次表に示すとおり、ほぼ、同じ結果となっている。

調査の内容は、①住居・通学、②経済・生活③福利厚生施設、④健康、⑤学生生活および悩みと大きく5項目に区分して行われている。

過去2回の調査結果を比較してみると、3年間で全般的な顕著な変動は認められないが、生

活環境が向上している反面、経費が増加していることが示されている。

調査結果の概要は、次のとおりである。住居面では、自室に風呂、台所、便所付きのいわゆる学生マンション形式の室に住む者が増えており、通学方法も自動車通学者が大幅に増え、現在では6割以上に達している。

これを反映して経済面では、月平均支出額が前回より2万円余り増えて、自宅生では5万円自宅外生では10万円余りとなっており、これを全国平均と比べてみると、自宅生は平均(自宅生の全国平均)以下であるのに対し、自宅外生は平均(自宅外生の全国平均)を上回るという結果になっている。

福利厚生施設関係では、食堂、売店、理容室の利用状況、施設に対する要望等については、特に変化はみられなかった。

健康面では、1年間に病気やけがをした者が58年度の調査では、約4割で前回より若干減少

しているのに対し、その治療費については、逆
に増えており、特に年間1万円以上支払ってい
る者が大幅に増えている。また58年の調査実施
後、保健管理センターがオープンしているので
健康面では次回の調査結果が注目される。

学生生活と悩みについては、試験、進級、将
来の進路に関するものが最も多いが、第2回目

の調査の前に本学カリキュラムの大幅改正が行
われたことを反映してか、試験、進級に関する
悩みが前回に比べて半減するという結果となっ
ている。しかし、その対処方法については、前
回同様その大部分が、友人先輩に相談、自分
で対処する、なりゆきにまかせるとしており、変
化はみられなかった。

調 査 年 度	性 別	医 学 部			薬 学 部			合 計		
		抽出数	回収数	回収率	抽出数	回収数	回収率	抽出数	回収数	回収率
55 年 度	男	233	147	(%) 63.1	95	59	(%) 62.1	328	206	(%) 62.8
	女	19	15	78.9	134	111	82.8	153	126	82.4
	計	252	162	64.3	229	170	74.2	481	332	69.0
58 年 度	男	279	161	57.7	127	95	74.8	406	256	63.1
	女	32	19	59.4	90	84	93.3	122	103	84.4
	計	311	180	57.9	217	179	82.5	528	359	68.0

3) 保 険 制 度 (学生教育研究災害傷害保険)

この保険は、文部省が、大学に学ぶ学生の被
る種々の教育研究活動中の災害に対する被害救
済の措置として検討してきた災害補償制度であ
り、財団法人学徒援護会が保険契約者となり、
東京海上火災保険株式会社を幹事会社とする国
内の損害保険会社20社との間に一括契約された
ものである。

任意加入であるが、本学では、この保険制度
の趣旨から全員加入を呼びかけ、昭和51年度の
第1期生入学以来、新入生の100%が加入して
いる。

補償の対象は、大学の教育研究活動中に被っ
た急激かつ偶然な外来の事故による身体の傷害
となっており、その範囲は、昭和51年の発足時
には、正課中および学校主催行事中のみであっ
たが、昭和55年4月からは、課外活動中(キャン
パス内のみ)が、昭和58年4月からは、キャン
パス内の休憩中およびキャンパス外の課外活
動中の傷害も対象になる等順次改善されてきて

いる。

本学における保険加入者の事故件数は、表1
のとおりであるが、その内容は、表2にみられ
るように、運動中の靱帯損傷、捻挫が最も多く
次いで骨折、脱臼および実験・実習中における
切傷、創傷が多い。昭和55年度以降に運動中の
事故件数が急激に多くなっているのは、それま
で計上されていなかった課外活動中の事故件数
を保険制度の改善により、課外活動中の事故も
補償されるようになったことに伴い、昭和55年
度から計上したためである。

表1の学生数に対する事故発生率をみると、
全国平均(昭和58年度調査で0.55%)に比し
て、非常に高い割合を示している。これは、受
験準備期間中の運動不足や、下宿生(全学生の
約85%)の食事面での栄養のアンバランス等か
らなる体力不足などが主な原因と思われるが、
今後、あらゆる面から事故発生の原因を調査し、
傷害事故の発生をなくするための対策を、早急
に立てることが必要であると考えられる。

表1 事故件数

年 度	学 生 数	正 課 中 (%)	学校行事中(%)	課外活動中(%)	キャンパス内の 休憩中 (%)	合 計 (%)
51	205	1(0.5)	1(0.5)			2(1.0)

52	410	3(0.7)	0			3(0.7)
53	642	7(1.1)	0			7(1.1)
54	873	9(1.0)	0			9(1.0)
55	1,021	16(1.6)	1(0.1)	8(0.8)		25(2.4)
56	1,134	10(0.9)	1(0.1)	12(1.1)		23(2.0)
57	1,168	8(0.7)	1(0.1)	14(1.2)		23(2.0)
58	1,177	16(1.4)	3(0.3)	22(1.9)	2(0.2)	43(3.7)
59	1,208	16(1.3)	1(0.1)	22(1.8)	1(0.1)	40(3.3)

() 内は学生数に対する被災者の割合を示す。

表2 事故内容

年度		51	52	53	54	55	56	57	58	59	計
内容	内容										
	内容										
運 動 中	靱帯損傷・捻挫	(1) 1	(1) 1	(2) 2	1	(2) 6	6	(2) 11	(6) 16	(2) 13	(16) 57
	骨 折	1		1		3	1	1	7	12	26
	脱臼				(1) 2	(1) 1	(2) 5	(3) 7	(1) 4	1	(8) 20
	裂傷・挫創					(1) 1	1		4	(1) 2	(2) 8
	打 撲					2	1	(1) 2	1	1	(1) 7
	眼 の 損 傷				(1) 1	1	(1) 2		2	(1) 3	(3) 9
	歯 の 損 傷			1				1		1	3
	腰 痛					1	(1) 1				(1) 2
	アキレス腱断裂					(1) 1	1				(1) 2
	そ の 他					(1) 1	1				(1) 2
	計	(1) 2	(1) 1	(2) 4	(2) 4	(6) 17	(4) 19	(6) 22	(7) 34	(4) 33	(33) 136
実 験 実 習 中	切傷・裂傷・創傷		1	(1) 2	1	(2) 5	(1) 2	1	(2) 6	(1) 3	(7) 21
	火 傷		1	1	(1) 2					(1) 2	(2) 6
	薬 疹				(2) 2	3				1	(2) 6
	眼 の 損 傷						2				2
	捻 挫								(1) 1		(1) 1
	計		2	(1) 3	(3) 5	(2) 8	(1) 4	1	(3) 7	(2) 6	(12) 36
そ の 他	靱帯損傷								(1) 1		(1) 1
	挫 傷								1		1
	骨 折									(1) 1	(1) 1
	計								(1) 2	(1) 1	(2) 3
合 計		(1) 2	(1) 3	(3) 7	(5) 9	(8) 25	(5) 23	(6) 23	(11) 43	(7) 40	(47) 175

() 内は、女子学生で内数を示す。

4) 福利厚生施設

イ. 食堂

昭和52年4月から、福利棟1階においてホールの面積224㎡、席数153で営業を開始し、財団法人学校福祉協会に経営を委託し、セルフサービス方式で運営されている。その後、昭和53年4月に価格改訂、同年8月に増築によりホールの面積458㎡、席数390となり、昭和55年12月と昭和59年7月に価格改訂され、現在にいたっている。

利用者数も学年進行に伴って年々増え、現在では一日平均1,500食を提供している。

ロ. 喫茶室・談話室

昭和55年4月から、福利棟2階で財団法人学校福祉協会の委託経営により運営されている。喫茶部分としては、35㎡、席数20であるが、同フロアに隣接の談話室（232㎡席数80）と併用して利用しており、一日平均300名が利用している。

また、談話室は、テレビ、新聞、雑誌、囲碁、将棋等の設備を設け、学生の憩いの場として提供している。

ハ. 売店、書店、理容室

昭和52年4月から、福利棟1階部分（130㎡）で一般業者により、書籍、日用雑貨等を販売し、また、厚生棟1階では、昭和55年4月から理容室（19㎡）を設け、いずれも市価より低廉な価格で運営されている。

5) 健康管理

昭和58年4月、新設の医科系大学としては、全国に先がけて本学に保健管理センターが設置された。昭和59年2月には附属図書館3階にセンター建物が竣工し、本格的な活動にはいり現在に至っている。ここに至るまでの本学における学生および職員の健康管理活動の状況についてまず振り返って見たい。昭和51年6月、富山中部高校旧校舎に保健室が設置され、昭和51年度入学生の定期健康診断が初めて実施された。この時より現在に至るまで保健室業務を実質的

に支えてきたのは当時学生課所属の山田房子看護婦である。学校医としては河上内科医院院長河上清医師が学生の健康相談にあたった。昭和52年4月には新校舎竣工とともに保健室も福利厚生棟へ移転し、学校医は国立富山病院内科樋口洋医師に委嘱され附属病院開院までその任にあたった。昭和54年4月、事務局管理棟竣工とともに保健室は講義棟事務室隣へ引越した。昭和55年4月からは本学第2内科寺田康人医師が、昭和57年4月からは第3内科市田隆文医師が学校医となり保健管理センター竣工までその任にあたった。これまでの学生に対する健康管理業務の実際としては春季の学生定期健康診断、日常の保健室における救急処置および週一度の学校医による健康相談が主なものであった。また職員の健康管理は独自に庶務課と附属病院によって行われており、本学の学生、職員の健康管理業務の一体化が望まれていた。

昭和56年本学から保健管理センター設立の概算要求が文部省に提出され、昭和57年12月には幸いにも設置の内示を得ることができた。昭和58年2月評議会において「保健管理センター設置準備委員会」が設置され、センター規則の審議が行われた。同年4月、本学に正式に保健管理センターが設置され、運営委員会において所長および専任教官の選考が行われることになった。昭和58年8月15日、本学公衆衛生学加須屋実教授が所長（併任）として発令され、同年10月1日には本学第3内科助手であった斎藤清二医師が専任講師として着任し、山田房子看護婦とともにここにセンターのスタッフが全員そろうことになった。

さて本学保健管理センター規則第2条にはセンターの目的として「本学における保健管理に関する専門的業務を附属病院との連携のもとに一体的に行い、学生および教職員の心身の健康の保持増進を図ることを目的とする」と明記されている。この趣旨に則りセンターとしては学生および職員の心身の健康に関するあらゆるニーズに応じられる体制をつくるべく下記のごとく業務体系を整えることになった。まず学生の心身両面における一般相談は斎藤講師が毎日これに応じている。履修上の問題、進路上の問題

については医学部より伊藤祐輔教授、薬学部より狐塚寛教授を相談員として委嘱し、学務相談にあたっている。心理療法を必要とするようなケースについては非常勤カウンセラーとして心理学の担当の教官の応援を得た。また各専門科学学校医（神経精神科、整形外科、産科婦人科、眼科、耳鼻咽喉科、歯科口腔外科）による健康相談を月2回ずつ実施している。さらに緊急の場合やセンターに来所しにくいケースに対応するため加須屋所長の自宅電話を開放し電話相談にも応じている。新入生に対しては保健管理センターのガイダンスとUPI（大学生性格検査）による健康調査を入学直後に行い、学生が気軽にセンターを利用できるようPRにも努めている。その効果あってか昭和59年（1月～12月）のセンター利用者は述べ件数にして学生3,225件、職員619件に達した。これは学生においては1人年間に3回センターを利用していることになる（定期健診、診断書の発行は除く）。学生および職員がより有意義な生活をおくるための心身の健康管理に対する援助というセンター本来の目的の達成のためにはさらに一層の努力と全学的取組みが必要と思われる。

6) 研 修

イ. 新入生合宿研修

富山は海と山の自然に恵まれ、本学は遠く富山湾を望み、近く北アルプス連峰を目にした呉羽丘陵に立地している。創設以来本学では新入生合宿研修を実施し、早春の5月上旬、積雪の中を開通間もない立山天狗平の立山高原ホテルを借切り、学生・教職員が共に一泊し、悠大

な自然の懐に入って己が人間の小ささを覚り、自然と人間・人間同士の出会いの場として語り合う機会としている。学生は全国から広く集まり、また地元出身者でも夏山はともかく、このころの厳しい春山の経験はなく、新入生には強烈な印象を与えるようで、卒業後も本学で学んだ良い思い出となっている。

バスとケーブルを乗継ぐ往復の団体行動から宿泊中まで班別にリーダーを設け、学生に役目を分担させて自主協力活動を促し、晴天に恵まれれば屋外で雪中を国見峠や地獄谷へと歩き、スノーボードで斜面を滑り興じて十分に若さを発散し、雨天なら屋内で講演やスライド映写で山に関する知識を聞くなどと自由時間も交え、両学部、学生一教職員の別なく互いに交流し親しく話し合う意義は大きい。

（ただし昭和58年度は、乗鞍青年の家で実施した）

ロ. 厚生補導研究会

学内には教育課程の基本的事項とその運営に関して協議する教務委員会と、学生の厚生補導に関する事項を審議し連絡調整を図る学生委員会があり、いずれも副学長（教育研究・厚生補導担当）を委員長として学生生活の正課授業と課外活動・生活改善等について配慮を心掛けている。この両委員会は毎年2月に合同で厚生補導研究会を一泊して催し、翌年の学年暦の作成から学生気質・自治活動・福利厚生・大学祭・交通事故防止・留年問題・講習研修会など幅広く学生・教務にわたる諸問題について活発な意見交換と討議を行っている。

第2節 課外活動

1) 文化系サークル活動

イ. 10年の歩み

51年4月、第1回入学生が入ってくると元気のよい連中は早速各種サークルの結成を開始し、1学期末までに次の10のサークルが誕生した。(英語クラブ、医薬研究会、演芸部、軽音同好会、ギターマンドリンクラブ、楮鞭会、植物研究会、チェスクラブ、美術部、歴史同好会)年末までには文芸部と写真部が加わり12となった。楮鞭会は、本学の前身富山大学薬学部で4年前に創設されていたのを受け継いだもので、漢方を学ぼうとするいかにも医薬大にふさわしいクラブである。

この12のクラブは、やがて文化サークル連合準備委員会(俗称文サ連)を結成し学友会設立準備委員会の一つの委員会となり、のちに学生自治会文化部会の母体となった。

年を経るごとに文化系サークルの活動は多様化して、55年には(申請中のものを含めると)実に28のサークル数となり、増減を繰り返しつつ現在の正式のサークル数は23となっている。

文化系各サークルは、運動部に比べて、部員の獲得が難しいという実状や名目だけの部員である幽霊部員問題といった共通の悩みを抱えている。毎年8月に開かれる文化系サークルリーダー研修会是这样の問題について主に討議する場となっているが、打開策は見出せないままになっている。体を動かして活動する運動等の部活動に比べてやや地味な活動であったり、時には授業の延長みたいになったりする文化系サークル活動では、これは一種の宿命なのかもしれない。

こうした中で、音楽系のサークルは比較的順調な活動を続けている。混声合唱団は、金沢大学、新潟大学とで三大学合同演奏会を毎年開き定期演奏会も5回開催している。部員獲得の悩みを持ちつつも室内合奏団は7回の定期演奏会を開き、昨年「バッハ生誕300年記念」と題する演奏会は特に好評であった。他にギターマンドリンクラブも6回の定期演奏会、クラシッ

クギター部は2回、軽音楽も4回の定期演奏会を開いている。少人数のフォークソングクラブは学内で“ちんまり”とコンサートを開いているが、昨年は市の公会堂で伊藤敏博と共演する壮挙を行った。邦楽の三曲会は、琴・尺八・三絃という日本古来の楽器を演奏するサークルで、師範級の男子尺八奏者を含めて、北陸三県大学芸交祭等で成果を披露している。

趣味的なサークルとしては、コントラクト・ブリッジクラブが比較的長い歴史を誇っている。囲碁将棋部も須藤教授とこれを継いだ古田教授の顧問就任でいよいよ部員の腕があがっているといわれる。茶華道部の顧問は木村教授で、大学祭での生け花の展示や茶会は一服の清涼剤となっている。演劇部と称さない「演劇を楽しむ会」は文字通り学内で“演劇を楽しむ”現況である。他に写真部、美術部も大学祭・芸交祭で成果を発表している。

変わったクラブとして、入院児童を楽しませるボランティア活動から生れた「青い鳥」は、お寺で日曜学校を開いて子供達とゲームをしたり小児科で七夕祭りやクリスマス会を開いたりしている。

典型的な文化祭のサークルとしての英語クラブは少人数ながら開学以来の伝統をもち、51年部の創設と同時に副部長岩崎文子は、第10回西日本学生英語弁論大会で優勝、賞としてサンフランシスコ旅行を得ているし、その後金沢大学でのスピーチコンテスト1位、特に昨年は富山大学、福井大学、信州大学でのそれぞれのコンテストで1、2位独占という成績をおさめた。コンピュータークラブではIBM-5550の特別レンタルやKD-290Aの導入等により専門家はだしの實力を持つ部員がいるといわれ、59年度パーソナルコンピューター誌で谷口部員のソフトが特賞候補になっている。楮鞭会は着実な活動続け会誌の発行、大学祭での展示と実演等で注目された。地味ながら天文部・植物研究部・薬学研究会も日常の活動や全薬ゼミナール、関薬連等でその實力を発揮している。

ほかにキネマ倶楽部が月1回自腹を切って世界の名画のビデオ上映をやっている。

こうしたサークル活動は今後も地味ながら息長く続くものと思われる。

ロ. 大学祭、芸交祭

51年度入学1回生も2学期を終えるころ気持ちにもゆとりが出て、他大学なみの大学祭を開こうという気運が生まれ、当時起りつつあった学友会設立準備委員会の設置と相前後して52年4月第一回大学祭実行委員会が2Ma浅井正嗣を委員長として発足した。

学内者だけでこじんまりとやれば、という大学側と一般公開を考えていた実行委員会側との数度にわたる協議の後、いずれ内容が充実すれば公開するという条件で第1回医薬大祭は9月30日夕方からロックコンサートで開始され、10月1、2日の本祭3日の大運動会、とその日の夕方からの後夜祭をもって幕を閉じた。ロック・招待講演・分科会映画・模擬店といった大学祭の一つの型がこの時設定された。招待講演は、森永と素中毒の研究で知られた岡山大学青山助教授、また分科会のテーマは「薬害問題」「精神医療」「医薬分業について」など身近なテーマで、まじめな一期生らしい意欲が感じられるものだった。

一般に公開して早く大学の存在を県民に知らせたいという学生の希望は、街にみこしを出し医薬展など54年の3回以降で実現した。(次表のとおり)

芸交祭(北陸三県大学学生交歓芸術祭)は、毎年10月から12月の間に文化系のサークル活動の発表の場として開催され、現在23の短大・大学が加盟し、本学も軽音楽、管弦楽・邦楽・美術・写真の各サークルがその成果を発表している。

『大 学 祭』

○回 ・ 期日

○記念講演会・演題・演者

○医薬展のテーマ

第3回(1979. 9. 27~30)

医学教育

中川米造氏

薬学教育

高野哲夫氏・辰野高司氏

解剖展

第4回(1980. 9. 19~22)

戦後を考えなおす

江藤 淳氏

研究の楽しみと苦しみ

柳田友道氏

心臓と腎臓

第5回(1981. 10. 8~11)

戦後から何を学ぶか

大江健三郎氏

胸の痛み、お腹の痛み

第6回(1982. 9. 30~10. 3)

日本語の由来 大野晋氏

肺—その正常と異常—

第7回(1983. 10. 27~30)

技術文明と人間 石井威望氏

誕生の不思議

第8回(1984. 10. 25~28)

日本経済の今後の見通しと医療 竹内宏氏

富山と成人病

ハ. サークル紹介

昭和51年冬組織された文化サークル連合設立準備委員会は、昭和52年「自治会」の設立と共に文化部会として発会した。歴代代表者は、初代議長高野隆、二代浅井正嗣、初代事務局長高田良久、二代丸山明夫、三代中村達弥、四代畑谷芳功、五代野村邦紀である。現在加盟サークルは23サークルであるが、休部中のものに歴史研究会、加盟申請中のものに書道部がある。その他かつて創部され現在廃部となっているサークルに、チェスクラブ、文芸部、映画サークル女性問題研究会、生物部、旅行同好会、ユースホステルクラブ、社会医療研究会、歎異抄研究会、聖書研究会、エスペラントクラブなどがある。以下23サークルを紹介する。

文 化 系 サ ー ク ル

ク ラ ブ 名	クラブ 員 数	設 立 年 月	主 た る 活 動
緒 鞭 会	52	昭和49年1月	植物採集、植物栽培、文献輪読
美 術 部	10	昭和51年5月	作品の制作および鑑賞
植 物 研 究 部	29	昭和53年5月	採集会、合宿等を行い、植物の生態を調べる。
ギターマンドリンクラブ	31	昭和52年5月	定期演奏会を毎年実施

軽 音 楽 部	48	昭和52年 4 月	定期演奏会, 新歓コンサート
英 語 ク ラ ブ	18	昭和51年 5 月	大学祭におけるスピーチコンテスト 北陸五大学交歓会への参加
写 真 部	31	昭和51年12月	写真展(年2回)撮影会
コンピュータークラブ	14	昭和52年 5 月	ミニコン・マイコンを使い, プログラミングを楽しむ
混 声 合 唱 団	50	昭和52年 4 月	他大学との合同演奏会, 定期演奏会を実施
室 内 合 唱 団	19	昭和52年 6 月	定期演奏会, 全日本医学生オーケストラ参加
クラシックギター部	13	昭和53年 5 月	定期演奏会, 北陸三県合同演奏会への参加
囲 碁 将 棋 部	23	昭和59年 5 月	職員との対抗試合, 大学対抗戦
社 交 ダ ン ス 部	17	昭和53年11月	新歓・大学祭・クリスマスダンスパーティー
天 文 部	10	昭和54年 4 月	天体の観察, 写真撮影
演 劇 を 楽 し む 会	15	昭和54年 5 月	新歓・大学祭における公演
コントラクトブリッジクラブ	11	昭和54年 4 月	コントラクトブリッジ競技会の開催
ブラスアンサンブル	20	昭和54年 9 月	新歓コンサート・大学祭参加
薬 学 研 究 会	18	昭和54年10月	全国薬学生ゼミナールへの参加, 大学祭における研究発表
フォークソングクラブ	13	昭和55年 4 月	会員の演奏と発表
華 道 部	23	昭和56年 4 月	生け花の練習および発表会
青 い 鳥	24	昭和56年 4 月	小児科慰問, 日曜学校の子供たちとの交流
茶 道 部	33	昭和57年 5 月	勉強会, 練習, 大学祭での発表会
三 曲 会	20	昭和58年 4 月	尺八, 琴, 三味線 北陸三県交歓芸術祭に参加

2) 体育系サークル活動

イ. 10年の歩み

昭和51年4月, 富山中部高校の旧校舎を借り仮校舎に第1回生を迎えるにあたり, 課外活動の場(体育館等)の要望にどう対応するか, 関係者一同苦慮を重ねていた。

予想通り, 体育系クラブ設立の機運は早くから高まり, 5月末には15のクラブが設立された。練習場所と用具の要望が相次いで出され, 用具については希望に添うことはできたが, 練習場所にはほとんど困った。

幸い, 中部高校の深いご理解とご好意により週数回練習の場を与えていただいたとき, あたかも水を得た魚のように学生は大喜びだった。しかし, それでも練習場所の不足には悩まされた。クラブ毎に東奔西走, 不備な条件を良く克服し懸命に活動していた。

同じころ, 北陸三大学体育連盟(北三)と, 西日本医科学学生体育連盟(西医体)から加盟の

誘いが入った。

これが契機となり, 学生間で体育会設立の必要性が論じられると同時に, 体育系クラブ総括顧問金子教授(文化系クラブ総括顧問は田辺教授)の助言を受け, 「北三」加盟へ積極的に準備を進めた。

9月に学生の合意を得, 10月に加盟申請, 11月に承認された。あわせて, 名称は「北三」から「北四」と改められた。各クラブとも, 次年次大会に向けて練習に一段と熱が入った。

52年, 2回生が入学すると, 8のクラブが新しく誕生し, 計24クラブ(現在の数)となった。「北四」競技種目の内, 本学に無いクラブは, アメリカンフットボール, 少林寺拳法, 合気道, 自動車, 創作舞踊である。

体育会設立の議論がされてから, 約1年半余りを経た53年1月再びその必要性が唱えだされた。主たる理由は, 学内の体育的行事(運動会球技大会等)における責任の曖昧さ, 北四大会,

西医体等の手続き等の責任は……等であった。

難産ではあったが、53年5月体育会が発足し以後の体育行事や連盟の仕事が円滑に運ぶようになった。

6月の運動会は、杉谷地区の方々が弁当持参で大勢参加され学生も張り切り、盛り上がったものとなった。

教授会の承認を得て「西医体」加盟、10クラブ初参加、「北四大会」12クラブ、141名初参加、さらに関西薬学生大会（関薬）に視察団の派遣、秋の運動会等々、体育会は多くの業績を重ねた。学生の体育系クラブへの加入率（重複加入を含む）は、医学部92%、薬学部65%とスポーツに対する関心度は急速に高まった。

54年には、体育施設がようやく整い、水泳を除く各クラブは学内で練習ができるようになった。

先輩がいない、伝統のない新設大学という何かと苦勞の多い中で、55年には、県医師会、富山、高岡両医師会ならびに県教育委員会のご協力、西医体のバスケットボール（500人）、バドミントン（600人）競技をそれぞれ主管し、56年には、関薬の陸上競技大会を本学陸上競技場で、さらに59年度には、北陸地区国立大学体育大会（北国・57年福井医科大学の加盟により「北三」を「北国」に改称）を学生の手で運営し、他大学から高く評価された。

医薬大体育会が発足して、わずか7年余りで全学生、全サークルが一体となって日一日と築いた貴重な礎は必ず後輩に引き継がれ、やがて良き伝統を構築するであろう。

競技力においても、年毎に力をつけ近年の西医体や関薬での活躍は目ざましい。なかでも、59年の北国大会で「空手」、「硬式庭球」、「準硬式野球」の優勝、2、3位種目もあり確実に力をつけた証拠である。ことに「準硬式野球」は、北信越で優勝し地区代表として全国大会に進み活躍した。

個人競技でも、全国レベルの大会で活躍した1回生の宮林千春（空手）、窪田裕子（体操）、2回生の新島光宏（陸上5000m）、4回生の山崎晶子（スキー・アルペン）、牧山尚也（水泳）諸先輩の業績は特記するに値する。

伝統と先輩のいない新設医薬大、暖かな教職員の後ろ楯があったとはいえ、10年間の苦悶苦闘のクラブの足跡を大切に、団結と厳しいトレーニングで築いた礎をますます大きく育てよう。

開学以来、大学行事として行われてきたスポーツ大会、第1回（春季）は県営軟式野球場で、秋は、中部高校河川敷グラウンドで全学生教職員が参加し盛大に行われた。終了後、大教室で学生と教職員との交流会、有意義な集いであった。最近はやっと淋しい大会になっているのが気がかりである。

スキー講習会も、12月の休暇を利用し志賀高原スキー場で、今日まで9回継続されてきた。

学生には、最も人気の高い行事である。講習内容も、全日本基礎スキー代表の相田氏を特別講師に迎えるなど年毎に充実してきた。

特に、この講習会の指導者全員が本学の教職員であることと、学生と寝食を共に生活するところに大きな意味がある。今後は、もっと多くの学生、教職員が参加できるシステムに改めていくべきであろう。

これらの諸行事の内容をさらに検討し、特色ある医薬大伝統行事に育てようではありませんか。

ロ. サークル紹介

体育会は開学とともに組織され、今年度で八期を迎えました。ここで初代からの体育会委員長を紹介します。初代から、宮林千春、近藤寛也、影山広美、熊田晶夫、森田諭、大橋一満、奥村昌史、藍寿司。けっして、組織の長となる人物だけでその組織が活動できるわけではありません。しかし組織の長は、やはり組織の顔です。組織の活動状態をはっきりと反映します。先に紹介した歴代委員長は体育会の看板を背負って時として看板の重さに危く潰されそうになって踏ん張ってきた。歴代委員長の足跡は現在に至って立派に受け継がれています。次に各クラブの紹介をいたします。

体 育 系 サ ー ク ル

60. 4 現在

ク ラ ブ 名	クラブ 員 数	設立年月日	主 た る 活 動
サ ッ カ ー 部	43	昭和51年 5 月	昭和59年度北陸地区国立大学体育大会 2 位
男子バスケットボール部	32	昭和51年 4 月	最近は着実に実力をつけてきている。
女子バスケットボール部	15	昭和51年 4 月	部員も増え、北国大会の入賞をめざす。
男子バレーボール部	22	昭和51年 4 月	第二期黄金期を目指し頑張っている。
女子バレーボール部	15	昭和52年 4 月	関西薬学学生体育大会を中心に練習に励んでいる。
ス キ ー 部	44	昭和51年 4 月	練習量も多く、西医体で常に上位を占めている。
基 礎 ス キ ー 部	18	昭和51年 4 月	春・秋は立山、冬は赤倉・八方と一年中スキーをやり基礎スキーを身につけている。
山 岳 部	26	昭和51年 4 月	ヒマラヤの高峰を目指し、身体鍛錬している。
ヨ ッ ト 部	14	昭和53年 9 月	昭和59年度に救助艇及びヨットを購入し、練習に励み北国大会入賞をめざしている。
水 泳 部	11	昭和51年 4 月	個人戦においては今日まで優秀な成績を収めている。
空 手 部	34	昭和52年 4 月	昭和56年度北陸地区国立大学体育大会団体優勝 昭和59年度 “ 団体～個人優勝
柔 道 部	12	昭和53年 4 月	経験者も増え、試合そのものに勝てるようになってきた。
剣 道 部	41	昭和51年 4 月	北信越大会入賞を目指して頑張っている。
弓 道 部	28	昭和51年 5 月	昭和56年度北信越男女 3 位 西日本医科学生総合体育大会 2 位（女子）
卓 球 部	48	昭和51年 5 月	昭和56年度西日本医科学生大会 7 位入賞
バ ド ミ ン ト ン 部	39	昭和51年 4 月	昭和57年北信越Ⅲ部リーグ優勝（女子） 昭和57年度西日本医科学生総合体育大会予選リーグ準優勝
体 操 部	18	昭和51年 4 月	北陸地区国立大学体育大会の優勝を目指し頑張っている。
ハ ン ド ボ ー ル 部	13	昭和51年 4 月	西日本医科学生総合体育大会の入賞、優勝を目指して頑張っている。
軟 式 庭 球	46	昭和52年 4 月	北陸地区国立大学体育大会の優勝を目指して頑張っている。
硬 式 庭 球	59	昭和51年 4 月	昭和59年度北陸地区国立大学体育大会団体優勝
ラグビーフットボール部	67	昭和51年 4 月	昭和59年度西日本医科学生総合体育大会ベスト 8 入 “ 高専大学リーグ優勝
陸 上 競 技 部	14	昭和51年 4 月	第33回西日本医科学生総合体育大会総合 4 位 第34回 “ 5 位
準 硬 式 野 球 部	25	昭和51年 4 月	第36回北陸地区国立大学体育大会優勝

3) 課外活動施設

本学には、下記の課外活動施設設備があり逐次完成していますので紹介します。

体育館:課外活動施設として最初に昭和51年に完成した施設で、床面積は1,457㎡あり第1体育室では、入学式、卒業式等諸行事の他、各種の課外活動に使用し、また第2体育室(168㎡)では、空手道部、体操部が活動し2階は、卓球場およびトレーニング場としての器具が整備されている。

厚生棟:この棟は、昭和51年に完成したが、昭和54年3月まで、仮管理棟として事務局が使用していた。

昭和54年10月に内部の改修工事を行い、新しく学生の厚生棟として、大集会室、小集会室、共同サークル室、和室、印刷室等が完成した。また昭和58年に、大集会室に防音設備が完備し音楽室として使用している。昭和59年度には和室を拡張改修した。

弓道場:昭和53年度に完成した6人立射場を有する施設で、射場面積は128.4㎡あり、弓道部の課外活動用に使用している。

武道館:昭和57年3月29日に竣工した総面積335㎡で、柔道部と剣道部が半分ずつ課外活動に使用する他授業用剣道にも使用している。

テニスコート:昭和51年度末にクレークコート

4面とアンツーカーコート2面が完成し、昭和57年には、全天候型コート2面が完成するとともに昭和58年度には、クレークコート一面をアンツーカーコートに改修し、現在に至っている。また、昭和59年度に、打球板も鉄筋コンクリート製で完成している。

陸上競技場:この競技場は、400m8コースのトラックと、サッカー場一面がとれるフィールドを有する総合陸上競技場で昭和54年10月に完成したものである。

また昭和58年度には、日本陸上競技連盟の3種公認の総合陸上競技場として認定されている。

野球場:昭和53年度に完成した。両翼は92mバックスクリーンまで100mあり内野はクレー土、外野は芝を張った野球場である。準硬式野球部が課外活動に使用するほか、授業用および教職員の球技大会にも使用している。なお、昭和59年度に外野フェンス敷設と内野の土の入れ替えをした。

水泳プール:昭和59年度に完成したもので、25m7コース、水深1.3m~1.4mで、循環ポンプ等機械類も最新のものを備えている。水泳部の課外活動および授業用に昭和60年度から使用を始めている。

第3節 卒業生の動向

1) 医学部

私の机のある研究室の窓から講義棟の前庭が望める。今年は二本、桜の花が咲いた。毎年の卒業生の記念植樹のうち、第一回生・二回生の植えた桜が咲いたのだ。枝ばかりの木を不安な心持ちで見上げた入局二年目の春を昨日のことのように思いだす。仕事に追われ、来る日々ばかりを思う日常に、ふと過ぎた日々の重みを感じた。

昭和51年2月、私たち第一期生は入学願書を西長江の県立中央病院内におかれた大学事務局へ送った。受験票をもった私たちを迎えたのも合格通知を手にした私たちを迎えたのも、冬になれば雪の舞い込む中部高校旧校舎である。仮住いから建設中の杉谷キャンパスへ……。所は変わったが行うことすべてが創始である状況は変わらない。私たちはそのことに興奮も感じる一方、層の薄さ、歴史の浅さに意気消沈したことも多かった。周囲の人々に励まされ、氣をとり直して理想を支え、行動を持続してきた十年間であったように思う。

昭和60年3月、四回目の卒業生が巣立ち、四本目の桜の木が植えられた。

本学医学部同窓会は開学と共に準備された。正式に発足したのは昭和57年3月、第一回生の卒業時である。発足に際しいくつかの事業計画がたてられ、現在、研究・診療と会務遂行の挟み撃ちに役員一同窮々としながらもそのいくつかが実行されつつある。ここに些少ながらこれまでに進められた卒業生の動向に関する調査結果を報告し、若干の検討を試みたい。

表1は、卒業後出身大学に引き続き在籍するいわゆる「大学に残る」卒業生(表1a)と、他学あるいは他医療機関に在籍または勤務する「大学を出る」卒業生(表1b)の卒業生全体に対する割合を示したものである。第一回生では同じ新設校の中でも島根・滋賀に比べ本学および浜松は「残る」卒業生が多い。ところが二回・三回と下るにしたがい、本学では残る卒業生が50%台に落ちこむのに対し、浜松では70%

近くが依然残っている。一方、島根・滋賀では各期とも残る卒業生は60%を越えない。入学者数に占める大学設置県内およびその近県出身者数と「残る」卒業生数との関係が未調査であったりするため、この表は実際のところ単に事実を数表化した以上の意味はないが、こんな仮説をたてるのも興味深い。それは大学をとりまく社会的条件、つまり大学設置地域の人口・医療事情等と卒業生の動向との相関である。表2は表1の各大学の設置された県の人口・人口密度・人口1万人あたりの医師数・病院ベッド数、参考までに年間快晴日数・最寒月の平均気温(最暖月はどこでも8月で26℃位である)をまとめたものである。表1と対照する。浜松医大のある静岡県では全人口に比して医師数・ベッド数共に少なく、いわば医師の需要が多いといえる。このことが「残る」卒業生数に関係するのではないだろうか。逆に「出る」卒業生が多い島根では確かに医師数・ベッド数とも人口に比してかなり多い。本学の場合、富山県そのものは全国的にみて中位の医師数・ベッド数であるが、隣県の新潟県・岐阜県はそれぞれ12—9人、115—90床と少なく、隣接地域を合わせて考えた場合(ただし石川県は医師数18人以上、ベッド数165床以上でそれぞれ全国第3位・4位の高充足県である)まだまだ医療の充足が望まれる地域にあると考えられそうだ。平均63%という「残る」卒業生数はその反映かもしれない。地域の医師不足を解消するという新設医大構想の一つの目標はこれをみる限り達成されつつあるといえる。しかしこうした需給関係は地域の人口増がそう簡単にはおこらないことを考えると、たとえ人口の高齢化に伴う医療対象人口の増加を考慮に入れたとしても、現在のペースで医師の供給が進めば早晩平衡に達することは確かだろう。事実、厚生省は「将来の医師需給を均衡のとれたものにするために、当面70年をメドに医師の新規参入を最低限一割程度削減する必要がある」との見解を示している。医師をとりまく今後の状況は決して明るくはない。そう

した中で本学卒業生の動向は今後どのような推移をみせるであろうか。

次に表3を示す。6年制の医学部では、昭和57年3月、第一回生75名が卒業し、以後これまでに第二回生102名、第三回生92名、第四回生102名、計371名が卒業した。このうち女子はそれぞれ9名、14名、12名、6名、計41名である。各回卒業生がどんな講座に進んだかを本学に「残った」者、「出た」者あわせてまとめたものが表3 aである（四回生は現在集計中）。一見してわかるように内科・外科といった臨床医学系に進む卒業生が圧倒的に多い。他学の資料がないため本学の動向を他と比較検討することはできないが、医学部卒業生の多くが臨床系に進むのは一般的な傾向である。しかし臨床系に進む者も、研修医としてまず実地臨床の道をたどるものと、大学院へ進み所属科の専門分野について研究から着手する者と二通りある。多くは前者である。後者には臨床系講座に籍をおくが、基礎系講座に出向して研究を進めている者もあり、表中の臨床系に進んだものすべてが医師として診療にのみ従事しているとは限らない。一方基礎系に進んだ者はほとんどが大学院に進み実験・研究に専心している。中には早くも欧米著名誌にその成果を認められた者もあり、今後の活躍が楽しみである。表3 bに各年度の大学院進学者数を示す。一定年限の臨床研修を積んでから大学院へ進学する者もあるため、各年度進学者は必ずしもその年に卒業した者だけではない。いずれにしても卒業生は現在、それぞれの道で日夜粉骨砕身の努力を続けており、同窓会総会の案内にも「欠席。とにかく忙しい。」という返事が大多数なのが現状である。

最後に、本学と本学卒業生の今後の姿について思いをめぐらせたい。

本学は東洋医学と西洋医学の融合、医学・薬学一体となつての健康と幸福の追求を建学の精神とした大学である。いうまでもなく、融合・一体化というのは両者を適当にまぜあわせたりつぎはいだりすることではなく、融合・一体化された医学・薬学の創造にはかならない。これは長い時間と多くの人々を要する仕事である。

創造性豊かな精神、それを育む風土の必要な仕事である。次のエピソードは示唆に富む。

「アインシュタインは、物理学に独創的な貢献はしなくなった晩年にも、彼以後の物理学の発展に非常に貢献した。彼はボーアをはじめ、何人かの独創的な若手の物理学者たちに論争をふっかけた。いくつかの論争で結局彼は負けたのだが、論争をしたことが、その若手物理学者の理論の発展に大いにプラスになった。つまり、アインシュタインに批判されることによって、それをきちんと論破するまで理論を発展させる。そういう契機・挑戦^{チャレンジ}をひきおこすことによって物理学に非常な貢献をした。」

広中平祐氏がハーバードの同僚に聞いたというこの話は、アインシュタインの偉大さと共に、人物を育み新しい学問を創造するアメリカの豊かな精神と風土を感じさせる。偉大な人物がいつでもどこでも栄光に満ちてばかりはいないことは例えばウィーンのモーツァルトを思えばよくわかる（彼はしかしプラハでは幸せだった）。本学が人物を育み、優れた診療・研究から新しい学問創造までの場となるよう本学同窓生はもちろん本県はじめ多くの人々の力と心を集めたい。今度開学十周年記念事業の一環として国際交流事業が計画され、同窓会もその一翼を担う後援会が発足したことは、豊かな風土づくりの一つとして大変喜ばしい。こうして力を集め、心を集め、かたちができていくのだ。昭和55年9月、第4回医薬大祭記念講演会の講師として本学を訪れた江藤 淳氏は本学を御覧になって、「アメリカの富裕な大学に比べても全く遜色のない諸設備を備えた大学」と評され、「文部省が、富山県が、諸君の大学をどんなに大切に考え、手塩にかけてあの設備をつくり上げたかがよくわかります。」

と、語られた。今度は私たちが心を傾け、力を合わせて、診療・研究・精神・風土といったかたちのないかたちをつくっていく番だ。全国から、全世界から本学に集まった人々が、本学を、そして本県の自然、生活、人々を愛情をもって語るようになれば幸いである。

（医学部同窓会長 高田良久）

表1—a 新設医大各校の出身大学在籍率

	富山医大	島根医大	滋賀医大	浜松医大
1期生	77.3(%)	50.6(%)	45.7(%)	74.4(%)
2期生	56.4	41.2	52.9	74.5
3期生	55.7	—	56.6	67.3
平均	63.0	45.9	51.7	72.1

表1—b 新設医大各校からの他学・他医療機関移行率

		富山医大	島根医大	滋賀医大	浜松医大
1期生	他大学	20.0(%)	35.3(%)	24.7(%)	19.5(%)
	他医療機関	2.7	3.5	6.2	
2期生	他大学	33.7	41.2	19.5	25.5
	他医療機関	9.9	12.4	8.0	
3期生	他大学	39.8	—	24.2	32.7
	他医療機関	4.5	—	12.1	

表2 新設医大設置県の人口・気候・医療事情

	富山県	島根県	滋賀県	静岡県
人口	1,103,459	784,779	1,079,885	3,446,776
人口密度 人/km ²	260	118	269	444
年間快晴日数 日/年	20	27	29	61
最寒月平均気温 ℃ (観測地)	1月2.1℃ (富山)	1月3.8℃ (松江)	1月3.2℃ (彦根)	1月6.0℃ (静岡)
医師数 人 (人口1万人当たり)	15~12	18以上	12~9	12~9
病院ベッド数 床 (人口1万人当たり)	140~115	140~115	115~90	90未満

(いずれも1980年現在)

表3—a 本学卒業生の講座別人数

	一回生	二回生	三回生
解剖学	1	1	
生理化学		1	1
病理学			2
保健医学	1		
公衆衛生	1	1	1
内科	28	26	35
皮膚科	2	4	1
小児科	6	4	6
精神科	2	3	1
放射線科	1	1	
外科	8	17	14
脳外科	6	4	3
整形外科	4	11	5
産婦人科	1	10	1
眼科	2	3	1
耳鼻科	3	6	3
泌尿器科	3	2	2
形成外科		1	
麻酔科	4	1	2
漢方	2	1	5
中央検査部		1	
その他		3	9
計	75人	102人	92人

表3—b 本学医学研究科(大学院)進学者数

	昭和57年度	昭和58年度	昭和59年度
本学出身者数() は総数	18人(23)	10人(14)	15人(22)

2) 薬学部

イ. 学部

昭和50年に医学部、薬学部、和漢薬研究所が一体になったユニークな富山医科薬科大学が創設され、生みの苦しみを味わいながら、今年昭和60年は創立十周年を迎えることになった。大学は設備、内容ともに充実した大学として発展してきた。薬学部には昭和53年に大学院博士課程が設けられ研究の態勢も整ってきた。4年制の薬学部では第1回生は昭和55年3月に54名が卒業し、昭和60年3月に第6回生99名を合わせ550名に達し、その中女子は322名を数える。

卒業生および同窓会(薬窓会)は本学前身の県立富山薬学専門学校(明治43年)、官立富山薬学専門学校(大正9年)から富山大学薬学部(昭和24年)を経て富山医科薬科大学薬学部へ

と連綿と受け継がれてきた。第1回卒（大正2年）から第72回卒（昭和60年）までの卒業生総数は約5,800名で、卒業生は全国はもとより海外にまで活躍している。昭和38年に大学院修士課程が創設され、第1回修了（昭和40年）から第21回修了（昭和60年）までに修了生は457名を数える。また昭和53年に大学院博士課程も設立され、昭和60年3月まで課程博士11名、論文博士20名を世に出した。

本学の沿革は富山薬学専門学校卒業生（第1回～第39回卒）は全国に雄飛し、優秀な製薬技術者を送り、この影響が研究、製造に志向した薬剤師を醸成したと思われる。その結果、有名製薬会社社長や重役を輩出し、本学の栄誉を十分に昂揚した。これをうけつぎ、本学は学制改革により、富山大学薬学部となり、卒業生（第40回～第66回卒）2285名を生み（中女子1105名）、薬専の伝統が継承され、社会的に優秀な中堅～上級幹部を輩出し、活躍している。

薬学部第1回生（通算67回生、昭和55年3月卒業）は54名で中女子は37名で66%を占めている。医薬大として第1回の入学生であり、当時の社会状況からみて、経済不況の中にあったが卒業生の就職は、病院9名（女9名）、会社関係13名（12名）、大学院進学17名（7名）、公務員4名（3名）、研究生7名（3名）、その他などを示している。とくに県下での女子の就職は難しいが、幸いに県下に100有余社の製薬会社があり、卒業生の先輩とのコンタクトによって解決の方向にあることは喜ばしいことである。

第2回生（通算68回生、昭和56年3月卒業）は81名（女・56名）で56名の女子の就職は県内30名、県外26名、県外の女子は地元で就職出来ないで富山にとどまりたいとの意向が出てきて大変であったが、諸先生方、卒業生の方々の努力によって解決することが出来た。病院15（女14）、会社関係26（25）、公務員4（2）、大学院進学24（5）、研究生2（1）その他などである。

第3回生（通算69回生、昭和57年3月卒業）は111名（女83名）と多く、女子83名の困難さ、地元志向のマイホーム型で職に対する積極性が

ぞのまれる。逆に会社（官庁）からは有能な人材をどんどん求め出る事態となってきた。病院14（13）、会社関係39（33）、公務員5（3）、大学院進学28（12）、研究生4（3）などとなっている。

第4回生（通算70回生、昭和58年3月卒業）は105名（女59名）で、病院16（13）、会社関係41（32）、大学院進学31（4）、公務員7（2）、研究生4（3）その他などである。

第5回生（通算71回生、昭和59年3月卒業）は98名（女52名）で病院9（8）、会社関係30（22）、公務員10（4）、薬局、卸7（5）、大学院進学33（2）、研究生2（2）で、次第にスーパーマーケット時代の拡大で、その中での薬局へ就職の機運が出ている。

第6回生（通算72回生、昭和60年3月卒業）は99名（女34名）で病院11（5）、会社関係29（15）、公務員7（5）、大学院進学33（2）、研究生8（2）その他

以上から昭和57年度卒業生から大学院への進学が多くなり、昭和60年卒までにおおよそコンスタントの数字となっており、男子就職における大、中企業会社の研究室への志向がとみに目立っている。女子に関しては毎年の悩みであるが、これは企業意識からすれば、せつかく1年つとめて役立っている折に、退職の事態が多くあるので、そのデメリットは大との意識が強くなっていることは今後の大きな問題である。

薬学部卒業生就職状況（昭55～60年）以下のとおり。

区 分	卒 業 年 度	就 職							大 学 院 進 学	研 修 生・ 研 究 生	そ の 他	合 計
		病 院	製(化 薬学 工業 会社 含む)	そ の 他 製 造	卸 ・ 小 売	公 務 員	そ の 他	計				
薬学部	昭和54年度	(9) 9	(11) 12	(1) 1	(1) 1	(3) 4	(1) 1	(26) 28	(7) 17	(3) 7	(1) 2	(37) 54
	昭和55年度	(14) 15	(25) 26		(1) 2	(2) 4	(5) 5	(47) 52	(5) 24	(1) 2	(3) 3	(56) 81
	昭和56年度	(13) 14	(33) 39		(11) 11	(3) 5	(6) 6	(66) 75	(12) 28	(3) 6	(2) 2	(83) 111
	昭和57年度	(13) 16	(32) 41		(3) 3	(2) 7	(2) 2	(52) 69	(4) 31	(3) 4	1	(59) 105
	昭和58年度	(8) 9	(22) 30	(2) 2	(5) 7	(4) 10	(2) 4	(43) 62	(5) 32	(2) 2	(2) 2	(52) 98
	昭和59年度	(5) 11	(15) 29		(2) 5	(5) 7	(3) 3	(30) 55	(2) 33	(2) 8	(1) 5	(35) 101
	計	(62) 94	(138) 177	(3) 3	(23) 29	(19) 37	(19) 21	(264) 341	(35) 165	(14) 29	(9) 15	(322) 550

() は女子で内数

大学院薬学研究科の就職状況は以下の通り

大 学 院 薬 学 研 究 科	前 期 課 程	昭和54年度	3	(4) 11	1	1		(1) 1	(5) 17	3	(2) 2		(7) 22
		昭和55年度		(3) 18	2		(1) 3		(4) 23	3			(4) 26
		昭和56年度	(2) 3	11	(1) 1		(2) 2	2	(5) 19	(2) 4		(1) 1	(8) 24
		昭和57年度	(1) 2	(2) 20			(2) 3		(5) 25	(1) 6	(1) 1		(7) 32
		昭和58年度	(1) 2	(2) 14			(4) 6	(1) 1	(8) 23	3			(8) 26
		昭和59年度	(2) 3	(1) 19	(0) 2		(0) 3		(3) 27	(0) 6		(1) 2	(4) 36
		計	(6) 13	(12) 93	(1) 6	1	(9) 17	(2) 4	(30) 134	(3) 25	(3) 3	(2) 3	(68) 165
	後 期 課 程	昭和55年度						1	1		1		2
		昭和56年度						1	1				1
		昭和57年度		1					1			1	2
		昭和58年度		1				2	3				3
		昭和59年度						(1) 3	(1) 3				(1) 3
		計		2				(1) 7	(1) 9		1	1	(1) 11

() は女子で内数

ロ. 大学院

大学院前期(修士)課程は昭和55年3月修了の第16回生から昭和60年3月修了の第21回生まで合わせて165名(女38名)が修了した。その中平均56%の方々は、大、中の堅実な会社研究室へ就職しているのが特徴である。また病院へは女子が増え、公務員も平均2～3名とコンスタントに、そして大学院博士課程への進学も次第

に増加していることは研究が軌道に乗ってきたことを示している。

大学院博士課程は昭和53年に設けられ、昭和56年に課程博士2名、57年に2名、58年2名、59年4名、昭和60年1名の計11名の課程博士を生んだ。また論文博士は昭和57年1名、58年9名、59年には10名で計20名の論文博士を生んだ。課程博士の中には、学位取得後、韓国や台湾の大学助教授、アメリカの大学・研究所の研究員

として活躍している者もあり、また、地元製薬会社の研究所にも就職している。

また、論文博士は本学出身で会社研究所に勤務のしている者や、本学薬学部・他大学薬学部に勤務している者に授与されている。

本学は創立以来10年の歳月を経たわけである

が、薬学部は古い伝統を生かし、良き先輩の力添えと、諸先生の努力によって就職の実を挙げてきた。大学院の前期（修士）課程、後期（博士）課程も次第に充実して参り、今後ますます教育、研究に実りをあげ、良い社会人を生むべく就職に最善をつくさなければならない。